広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第50号　2023.3〉

子どもの思いをのせた「子ども軸の道徳科」の授業作り

―学級活動と接続を図り，より望ましい学級集団を目指す―

木村　純也　　野元　祥太郎
鈴木　由美子　　宮里　智恵

Before moral education was considered a special class, classes on morality were given as general course units or package-type classes. In this research project, we aimed to clarify the educational effect of including a learning process to engage in for a certain period of time centered on learning in moral education, in order to better form a class group. We observed changes in the students' awareness regarding their class by implementing hyper-QU tests. The results indicated that this kind of learning process expands the students' cognition of their class group. Furthermore, the results suggest that forming links to class activities was effective for considering specific efforts to improve the group.

道徳科が特別な教科として位置づけられる以前から，総合単元型やパッケージ型の道徳の授業実践が行われてきた。本研究では，よりよい学級集団の形成のために道徳科の学習を軸として一定期間取り組む学習過程を取り入れることの教育的な効果を明らかにすることを目的とし，児童の学級に対する意識の変容をhyper-QUテストの実施により考察した。その結果，このような学習過程は児童が学級集団に対する認知を広げることが分かった。また，学級活動と関連を図ることは，集団の改善を図る具体的な取り組みを考えるために効果的であったと考えられた。

１．はじめに

道徳教育は児童生徒の人格形成において，とても大きな役割を担っている。長らく教科外の活動としてその要を担ってきた「道徳の時間」が平成30年度より小学校で，令和元年度より中学校で「特別の教科　道徳」へと教科化された。日本の教育界におけるこの大改革の背景には，大きな社会問題となったいじめ問題がある。「特別の教科　道徳」では検定教科書を採用することで指導方法や内容を明確化している。そうして，従前の「道徳の時間」時代に課題となった形骸化した授業展開や他教科への振り替えられるという状況を打開し，道徳教育の要となる時間の質的転換と量的確保が見据えられた。質的・量的に洗練された道徳教育を享受することができた児童生徒は，より豊かな人格的成長を実感することができるであろう。それはいじめ問題への対応という意味だけでなく，個々人が社会をよりよく生き抜こうとする内面的資質を高めることに通じる。

２．単元構想に基づく授業実践について

２．１　先行事例

中央教育審議会では，この度の学習指導要領の改訂方針でアクティブ･ラーニングを提案し，学校教育で育成すべき資質・能力について以下の三つの柱として整理している。

①何を知っているか，何ができるか（個別の知識・技能）
②知っていること･できていることをどう使うか（思考力・表現力・判断力等）
③どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びに向かう力･人間性等）

KIMURA Junnya，NOMOTO Shotaro，SUZUKI Yumiko，MIYASATO Tomoe
Creating Classes for "Moral Education Centered on Children" That Features the Children's Feelings
- Forming Connections to Class Activities to Aim for More Ideal Class Groups -

押谷（2017）は，この三つの柱の育成は，道徳性の育成によって可能となるものであり，道徳教育が根幹を担うことになるとしている。押谷（2017）は，認知的側面・情意的側面・行動的側面を包含的に捉え,「特別の教科　道徳」を要として子どもたち自身が主体的・共同的な道徳学習を組み立て，取り組み，日常化・習慣化する学び（モラル・アクティブ･ラーニング）を提唱している。その工夫として,「総合単元的道徳学習」を挙げている。「総合単元的道徳学習」の特徴には以下の点がある。

①テーマを設定し，1～2か月くらいの期間で指導計画を考える。
②子どもたちと一緒に考え，家庭や地域の人々も参画できないかを考える。
③子どもの意識の連続性を考え,関連する教育活動をつないでいく。
④総合単元的道徳学習用のノートを創る。
（押谷（2017）8ページから11ページを参考にして筆者がまとめた。）

さらに田沼（2017）は，道徳教育の改善に向けてカリキュラム・マネジメントの側面からもアプローチし，道徳的な学びを高めるために弾力的な指導計画を取り入れることの必要性を説いている。指導計画の弾力的な運用は，計画を実践しつつ評価してその場で改善しながら引き続きの指導を行うという発想のもとに実現され,その具体として「パッケージ型ユニット」を提唱している。「パッケージ型ユニット」の特徴は以下の点が挙げられる。

①年間35時間の道徳科指導計画を大単元として捉え，学年・学期・月ごとのスパンで見直す。
②各々の時期に期待する道徳的な子どもの成長を意図した指導計画を立てる。
③年間指導計画の各所に2～4時間程度のショートプログラムを組み入れる。
（田沼（2017）12ページから16ページを参考にして筆者がまとめた。）

田沼（2017）と押谷（2017）に共通する考え方は，道徳の授業を独立したものとせず，教育活動全体との関連の中で効果的な学習体系を形作ることを目指している点である。これらの発想に基づく学習過程の実践は，様々な書籍でその具体を目にすることが増えてきた。しかしながら，それらの実践は学習をコーディネートする教師の立場から見た道徳の授業の在り方であり，学習過程がもたらす効用について言及しているものは少ない。これは,「子どもの姿を評価する」ということが道徳科においてデリケートな領域であることも影響しているといえる。

２．２　本実践「子ども軸の道徳」

鈴木（2012）は道徳の授業を子どもの立場から体系化し，モデルを示している。鈴木（同）は，道徳の授業をコアとして，各教科または体験活動を組み合わせて作成する「道徳学習プログラム」を提唱し，積極的に教科学習と体験活動を関連づけることで，学級で共有された道徳的価値観を土台とした道徳的実践の場を設けている。こうして，学級の道徳的雰囲気の形成と個人の学びの深化を無理なく接続できるとしている。子どもたちの体験に着目して学習過程を組むことで,子どもたちの意識の主体性を保ち,行動化を容易なものにしている。授業者は，先に述べた「総合単元的道徳学習」と「パッケージ型ユニット」に加え,「道徳学習プログラム」から着想を得て本実践に臨む。

本実践では，子どもたちの思いをより前面に強調した学習単元づくりとして,「子ども軸の道徳科」を提案する。「子ども軸の道徳科」の特徴は以下の点である。

①児童一人一人の道徳的な成長とともに,学級集団としての育ちを期待する。
②学習テーマを設定し,道徳の授業や学級活動,その他行事などの教育活動を組み合わせて，複数時間の単元を構成する。
③学習内容や学級での取り組みに,子どもたちの思いを反映させる。
④単元の総時間数は,子どもたちの実態に応じて柔軟に伸縮する。
（筆者作成）

この提案は，実効性のある道徳の授業の体現を目指している。実効性の検討の為には，学習効果の客観的測定が欠かせない。数値による評価が馴染まない道徳科において最大の課題であるが,「子ども軸の道徳科」では学級集団としての育ちを念頭に置いているため，hyper－QU テスト（以下，QU テスト）を活用して学級集団の様相の変化を数値化することができると考えた。

個別の道徳的価値理解の程度や実践意欲を直接測定することはできないが，QU テスト結果と学習テーマや扱った内容項目の関連を教育的視点で分析することで，学習効果の検討を行うことができると考える。

本実践研究では，二つの小学校において小学校２年生を対象とした学習単元「子ども軸の道徳科」を行い，学習単元として道徳科を構成することによる効果を明らかにする。「子ども軸の道徳科」としたのは，一般的に学習単元が教師主導で構成されるのに対し，子どもの考えを大切にし，授業の中で子どもが感じた疑問や思いを大切にしながら，柔軟に学習単元を構成することをねらっているためである。二つの小学校では以下の点を共通にして実践研究を行った。

対象：小学校２年生１クラス
学習単元：道徳科と学級活動を組み合わせる。道徳科の教材ならびに学級活動の内容は，学校ごとに独自に選定した。
効果検証：学習単元の前後で QU テストを行い，個別の児童の変容とともに学習集団の変容をみとる。QU テストの分析は業者に依頼し，結果について両小学校の担任ならびに研究者で検討する。それぞれの学校の研究計画は以下の通りである。

研究計画：
【広島大学附属東雲小学校　2021 年６～７月】
〈事前調査〉
６月 30 日の学級活動の時間に QU テストを行う。所用時間 15 分。担任が読み上げ，児童が回答した。
〈実地授業〉
第１時　７月１日　４時間目　道徳
第２時　７月２日　１時間目　学級活動
第３時　７月５日　３時間目　道徳
第４時　７月７日　２時間目　道徳
第５時　７月９日　４時間目　学級活動
〈事後調査〉
７月 16 日学級活動の時間に QU テストを行う（同上）。

【広島大学附属小学校　2022 年１月～２月】
〈事前調査〉
１月 19 日（水）学級活動の時間に QU テストを行う。所用時間 25 分。児童が自分のペースで回答した。
〈実地授業〉
第１時　１月 21 日　５時間目　学級活動
第２時　２月７日　２時間目　道徳
第３時　２月 10 日　３時間目　道徳
第４時　２月 16 日　１時間目　学級活動
第５時　２月 24 日　３時間目　学級活動
〈事後調査〉
２月 25 日学級活動の時間に QU テストを行う（同上）。

研究仮説：
道徳の授業と学級活動を「子ども軸の道徳科」の観点で組み合わせた学習単元を設定して実施することで，個々の子どもの変容とともに，学級集団の変容も見とることができるであろう。

検証方法：
学習単元前後に QU テストを行い，子ども個々の変容とともに学級集団の変容をみる。変容した要因について，道徳の授業での児童の発言，ワークシートに記入した意見，学習単元後の振り返りワークシートを参考にして検討する。

３．広島大学附属東雲小学校における実践

３．１　広島大学附属東雲小学校の研究方針

広島大学附属東雲小学校（以下，東雲小学校）では，「教科等本来の魅力と学びのつながりの深化」を研究テーマに教育実践を行っていた。授業者は，学習者である子どもたちが自分なりのより望ましい生き方を考えることができる点に道徳科の魅力があると考え，本実践に臨んだ。

３．２　学級の様子

本実践は，小学２年生（男子 16 人，女子 16 人）を対象にしたものである。この学級は，昨年度からクラス替えや担任替えをせず進級をしている。数名の転出入はあったものの，実践を行った７月の時点で，昨年度からの学級の約束事は児童の間で共有されており，全員で学級の雰囲気を作るという意識が芽生えていた。

３．３　「子ども軸の道徳科」構想

４月当初，学級の目標について話し合った際に，児童からは「明るくて優しいクラスにしたい」「一年生のことを考えるクラスにしたい」な

ど，様々な思いが出ていた（写真１）。それらの思いを受け，学級目標は「こころもからだもげん気」に決まった。本実践は，こうした児童の思いを反映させた学習活動を展開し，実生活への接続を図ることができるよう，道徳の授業内容と特別活動（学級活動）を関連づけた「子ども軸の道徳科」を意図した。道徳の授業では個人の道徳的価値理解の促進や内面的資質の伸長をねらい，特別活動では集団での合意形成や具体的な行動方針の決定をすることを主たる活動とし，双方を有機的に関連させることで，学級目標の実現のために一人一人が能動的に生活を送ることで，学級集団としての高まりを期待したものである。「子ども軸の道徳科」を構想するにあたり，児童の思いが学習の発端とできるよう，扱う教材は児童とのやり取りの中で決定することとした。

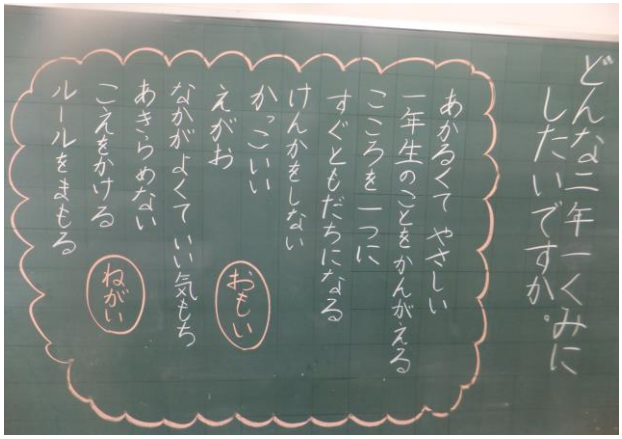

写真１　子どもの目指すクラス像（東雲小）

３．４　授業実践の概要

単元は全５時間となった（図１）。扱った教材は，すべて光村図書『きみがいちばんひかるとき２年生』に掲載されているものである。第３時以降の構想は，第２時までのやり取りを受けてから決定した。

第１時では，『クラスの大へんしん』を扱った。２枚のイラストを見比べ，望ましい点や改善すべき点を話し合った。そうすることで，学級としての望ましい様子に対する理解を深めることができた。第２時では学級会を開いた。前時の道徳の学習で考えたことを交流し，自分たちの学級の課題点やこれからみんなで考えていきたいことを話し合った。話し合いの結果，「整理整頓をすること」と「友達と仲よくすること」の二つについて考えることを学習課題として設定することとなった。第３時は道徳の授業で『黄色いベンチ』を扱った。思いがけず他者に不利益を与えてしまった登場人物の心情を考えることで，公共物を使う際に配慮する点について理解を深め，教室内にある物品の扱い方について考えを整理した。第４時も道徳の時間で『ぶらんこ』を扱った。登場人物の心情を話し合うことで，乱暴に振る舞う友達にもその人なりの思いがあることに気付くことができ，友達の思いを汲み取りながらみんなで気もち良く生活していくことの大切さについて考えることができた。第５時は単元の終末として再度学級会を開き，学級目標を実現するために大切にしたいことを話し合った。第５時での話し合いでは，第４時までの学習内容に触れながら考えを述べたり，具体的な場面での望ましい行動を考えたりすることで，自分たちの生活を見つめ直し，本実践での気付きや学習内容を実生活に生かしていこ

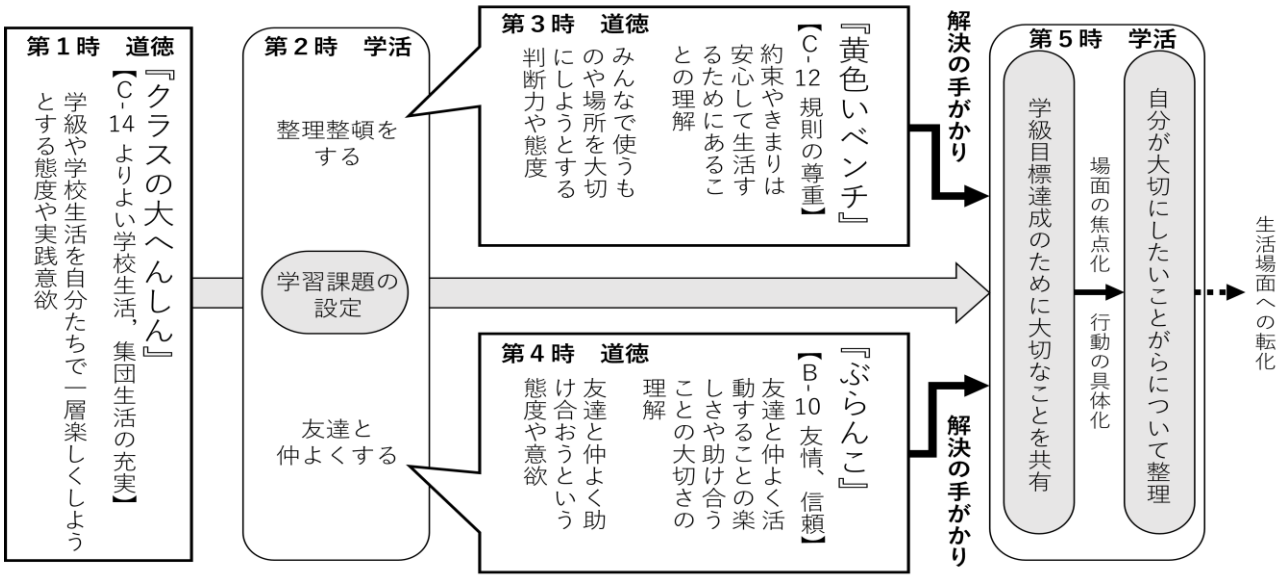

図１　東雲小学校　単元構想図

うとする児童の姿を見ることができた。

３．５　QU テストの結果

本実践では，学級目標の実現に向けた学級集団づくりが学習テーマであった。そこで，実践の前後で QU テストを用いて学級集団の様相の客観的な指標に照らし合わせて測定し，その変容をもって実践の効果について検討した。事前テストでは，学級満足尺度を見ると，「学級生活満足群」に 19 人，「侵害行為認知群」に 5 人，「非承認群」に３人，「要支援群」の２人を含み「学級生活不満足群」に５人が位置した。「学校生活意欲総合点」の分布は３人が 24～28 点，11 人が 29～32 点，11 人が 33～34 点，７人が 35～36 点だった。

事後テストでは，学級満足尺度を見ると，「学級生活満足群」に 18 人（56%），「侵害行為認知群」に８人（25%），「非承認群」に０人（０%），「学級生活不満足群」に６人（19%）が位置した。「学校生活意欲総合点」の分布は１人が 24～28 点，10 人が 29～32 点，11 人が 33～34 点，10 人が 35～36 点だった。テストの結果を図２，表１，図３に示す。

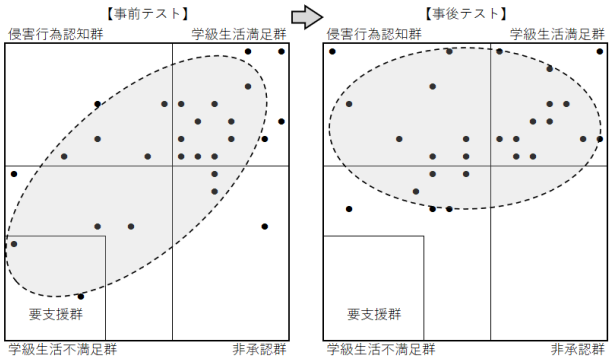

図２　東雲小学校 QU テスト
「学級満足度尺度の分布」

表１　東雲小学校 QU テスト
「学級満足度尺度の分布」における人数と割合

事前テスト	群	事後テスト
19 人（59%）	学校生活満足群	18 人（56%）
５人（16%）	侵害行為認知群	８人（25%）
３人（９%）	非承認群	０人（０%）
３人（９%）	学校生活不満足群	６人（19%）
２人（７%）	要支援群	０人（０%）

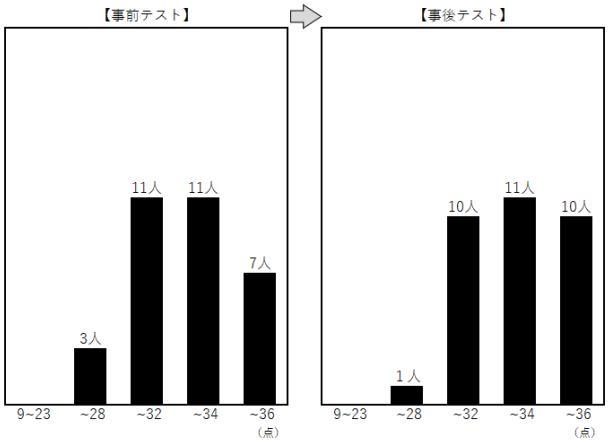

図３　東雲小学校 QU テスト
「学校生活意欲総合点の分布」

３．６　児童の記述より

図４は児童Ａが単元終了時に書いたふり返りである。自身が心がけたい事柄を矢印や吹き出しを活用して，複数の考え方と関連づけながら記述している。なお，児童Ａは事前では要支援群に位置していたが事後では侵害行為認知群に位置していた。周囲の出来事に対する課題意識の高まりとともに学級改善に向けた意欲の向上がうかがえる。

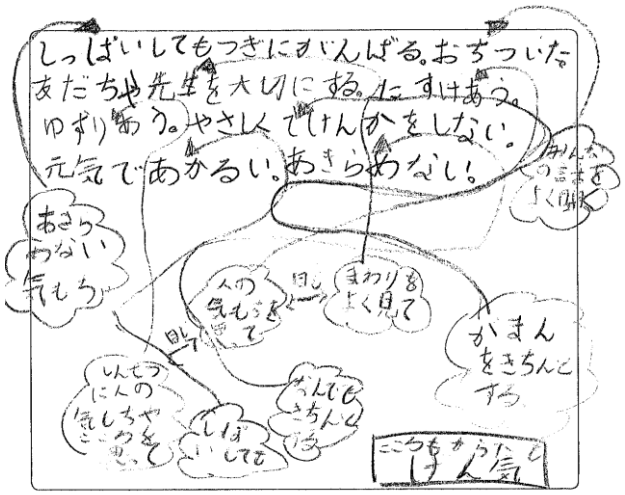

図４　児童Ａのワークシート（第５時）

また，児童Ｂは事前では要支援群にいたものの事後では学級生活満足群へと移行した。当初は承認欲求も満たされず学級生活でも後ろ向きな発言が多かったが，今回の実践を経て友達との関わり方について見つめ直したようである。児童Ｂは第４時のワークシートで，友達を自分から遊び誘う様子の絵を描いている（図５）。ここからも「友情・信頼」の捉えに対する前向き

な道徳的な高まりを感じることができる。

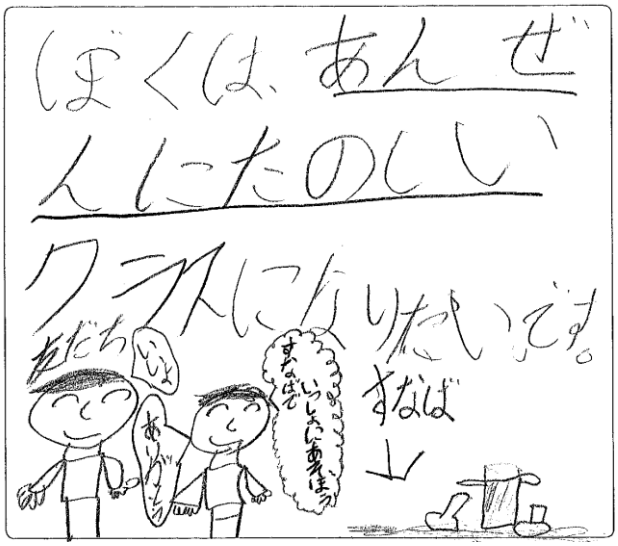

図５　児童Ｂのワークシート（第４時）

３．７　東雲小学校における考察

事前と事後のテストの結果を比較し，東雲小学校における実践について考える。QUテストでは，全体的に承認得点が上がった一方で，「学校生活満足群」はわずかに減少（59%→56%），「学校生活不満足群」がわずかに増加（16%→19%），「侵害行為認知群」が増加（16%→25%）している。侵害行為が増え学級に満足できない児童が増えたと考えることもできる。しかし，「学校意欲総合得点」も上昇していることを含めて考えるならば，自分たちの生活に課題意識をもち，これまでは気に留めていなかった出来事に目を向けた児童が増加したと解釈することができる。児童Ａはその一例と言える。小学校２年生児童が対象であったことを鑑みると，集団の中での一定期間をかけ，且つ複数教材と学級活動との関連を図りながらよりよい学級集団の在り方について考えてきた本実践の効果と言えるのではないか。

４．広島大学附属小学校における実践

４．１　広島大学附属小学校の研究方針

広島大学附属小学校（以下，附属小学校）では，「〈他者〉を楽しみ続ける子どもの育成」を研究テーマに実践を行っていた。道徳の授業においては，日頃は意識していない道徳的価値の大切さや内実を考えようとするとともに，学級における道徳性にも目を向け，学級生活を考えられることが道徳の授業において重要だと考え，本実践に臨んだ。

４．２　学級の様子

本実践は，小学２年生（男子16人，女子16人）を対象にしたものである。この学級は，前年度からクラス替えをせず進級しており，学級担任は当該年度より受け持っている。学級の課題を自分たちで捉え改善していこうとする自治的な姿勢も芽生えてきたが，その分トラブルも発生してきた。それらも成長や変化のきっかけにすることが本実践に取り組む一つの意味だと感じて実践した。

４．３　「子ども軸の道徳科」構想

本実践は，１月から２月の学年末に行った実践であり，あと少しで初めてのクラス替えを迎える時期である。そのため，児童が３年生になるまでに目指したい学級の実現に向けて，大切にしたことや取り組んでみようと思うことを考え，具体的な行動へと結び付けることができるように，道徳の授業内容と特別活動（学級活動）を関連付けた。全体の構想については，木村による３．３と同様である。異なる点は，第４時で考えた具体的な行動方針を個人で実践してみる「ちょっとやってみようキャンペーン」機会を設けた点，そして第５時に１週間の取り組みを振り返る機会を設けた点である。これにより，道徳的実践を続ける大切さやその難しさを共有しつつ，継続していく契機にすることもねらった。

４．４　授業実践の概要

単元は全５時間となった（図６）。第１時を終えた後，学級担任が各教科書会社の内容を吟味し，決定したものである。

第１時では，３年生に向けて「このメンバーで残りどんな学級生活を過ごしたいか」「集団としてどんなことを成長させたいか」の２点から，学級全体で深めたい内容について話し合った。話し合いの結果，「やさしいクラス」「仲の良いクラス」の二つについて考えることを学習課題として設定することとなった。第２時は，「やさしいクラス」に関わって，道徳科『ごめんね，もえちゃん（学校図書）』を扱った。自分の気持ちだけで相手に親切にするだけではなく，相手の気持ちに寄り添って親切にすることについて考えを深めることができた。第３時は「仲の良いクラス」に関わって，道徳科『みほちゃんと，となりのせきのますだくん（教育出版）』を扱っ

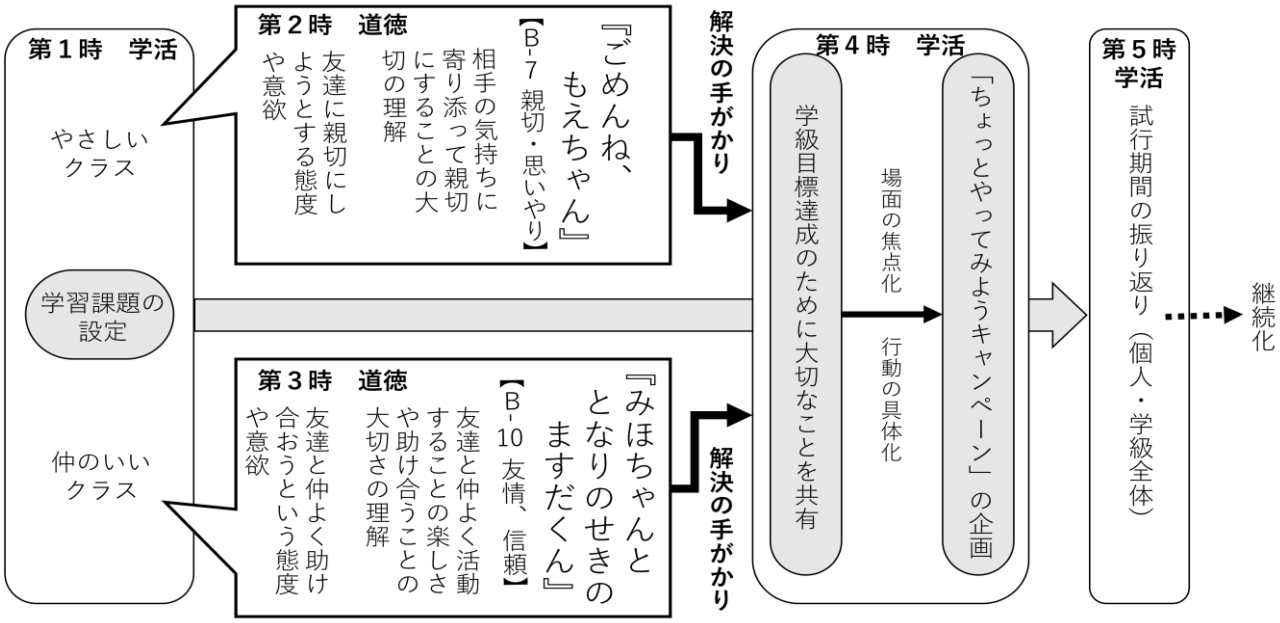

図６　附属小学校　単元構想図

た。相手の振る舞いを一方的に決めつけたり拒絶したりするのではなく，相手の気持ちや思いを想像したり寄り添ったりし合うような言葉や行動の大切さについて考えを深めることができた。第４時は学級活動の時間とし，道徳の授業内容を統合的に考え，目指す学級像の実現のためにできることを具体的に考えることとした。その後１週間の試行期間「ちょっとやってみようキャンペーン」を経て，第５時を迎えた。第５時では，自分が考えた具体的な取組について振り返るとともに，二つのクラス像について学級全体についての振り返りも行った。取り組んでみた達成感やより良い学級が出来上がった実感，改めて見えてきた学級の課題を受けて，継続的に取り組む大切さについて考えることができた。

４．５　QU テストの結果

附属小学校でも同様に QU テストを用いて学級集団の様相を客観的な指標に照らし合わせて測定し，その変容をもって実践の効果について検討した。

事前テストでは，学級満足尺度を見ると，「学級生活満足群」に19人（59%），「侵害行為認知群」に５人（16%），「非承認群」に３人（９%），「学級生活不満足群」に５人（16%）が位置した。「学校生活意欲総合点」の分布は２人が24～28点，９人が29～32点，14人が33～34点，７人が35～36点だった。

事後テストでは，学級満足尺度を見ると，「学級生活満足群」に17人（53%），「侵害行為認知群」に８人（25%），「非承認群」に２人（6%），「学級生活不満足群」に５人（16%）が位置した。「学校生活意欲総合点」の分布は２人が24～28点，10人が29～32点，10人が33～34点，10人が35～36点だった。テストの結果を図７，表２，図８に示す。

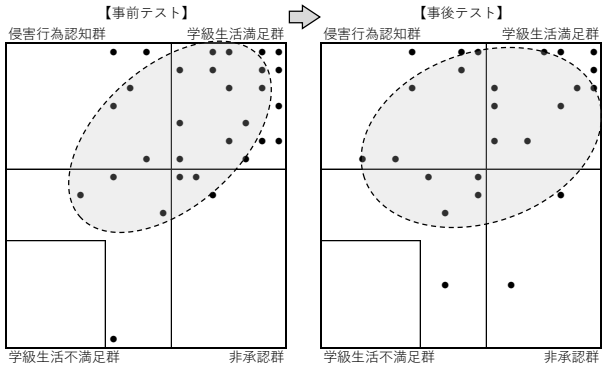

図７　附属小学校 QU テスト
「学級満足度尺度の分布」

表２　附属小学校 QU テスト
「学級満足度尺度の分布」における人数と割合

事前テスト	群	事後テスト
19 人（59%）	学校生活満足群	17 人（53%）
５人（16%）	侵害行為認知群	８人（25%）
３人（９%）	非承認群	２人（６%）
５人（16%）	学校生活不満足群	５人（16%）
０人（０%）	要支援群	０人（０%）

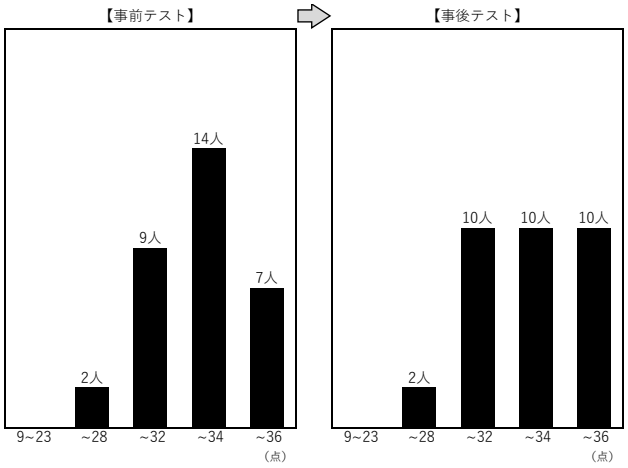

図８　附属小学校 QU テスト
「学校生活意欲総合点の分布」

４．６　附属小学校における考察

事前と事後のテストの結果を比較し，附属小学校における実践について考える。

まず，学級満足度尺度の分布を比較すると，事前では，学級生活満足群に集まっていたのが全体的に散らばっていったと言える。具体的には，侵害行為認知群５人から８人，被承認群が2人から３人に増えており，学級への否定的な捉えをしている児童が増えていると考えられる。学校生活意欲総合点の分布について，詳細に分析すると１回目より２回目の方が得点が高くなった児童は13名と半分に満たず，残りの19名は得点が変わらない，または低くなっている。

例えば，学級生活満足群から学級生活不満足群に変化した児童Ｃ（承認得点が８，非侵害得点が５変化している）の第５時のワークシート（図９）を分析する。

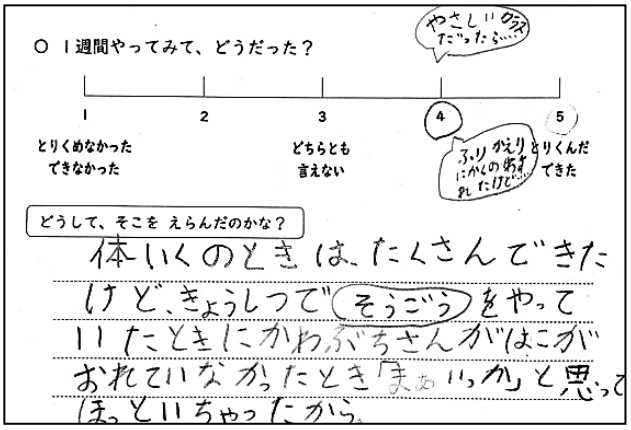

図９　児童Ｃのワークシート（第５時）

すると，１週間の試行期間の取り組みについて肯定的に振り返っていると同時に，具体的な場面を想定させたとき自分の行為を省察する様子が見られる。このように，事前では学級生活満足群が多かったが，事後には承認・非侵害に関わる得点が低くなったことについては,「なんとなくいいクラスだ」と思っていた児童が，単元を通して，良いクラスの基準が内面化され，学級を見直し始めていると考えられる。

５．二つの実践を通して―成果と課題－

本論の目的は，二つの小学校において小学校２年生を対象とした学習単元として「子ども軸の道徳科」を設定，実施し，学習単元として道徳科を構成することによる効果を明らかにすることであった。そのために，二つの小学校において，小学校２年生を対象とした学習単元を設定し，学習単元前後で QU テストを行って，効果について検討した。研究仮説は，道徳科と学級活動を「子ども軸の道徳科」の観点で組み合わせた学習単元を設定し，実施すれば，個々の子どもの変容と共に，学級集団の変容もみとれるだろうであった。

本研究の成果は以下の通りである。

第１に,「子ども軸」という視点を持つことで，単元を通して育てる子どもの姿を意識することができ，子どもの姿を見ながら柔軟に時間数を考慮しながら効果的な学習を実施できたことである。

東雲小学校と附属小学校の二つの実践は,「子ども軸の道徳科」の構想に基づき，道徳の授業と学級活動などを意図的に関連づけながら単元が計画されている。授業者は，子どもたちと話し合いながら学習内容や活動の具体を方向付け，実態に応じて総単元時数を調整し，児童一人一人の道徳的な成長とともに学級集団としての育ちを期待して実践に臨んだ。QU テストの「学級満足度尺度の分布」の事前と事後（図２，図５）を比較すると，どちらの実践においても右上がりに伸びる分布がマトリクス上方で左右に広がる分布へと変化していることが読み取れる。この分布だけを見るならば，学級生活への不満の減少とともに侵害行為認知が増加したということになる。それと同時に,「学校総合得点の分布」（図３，図８）では，実践後も子どもたちの意欲が低下することなく，学校生活に対する意欲が高い水準で保たれていることがわかる。つまり，子どもたちはそれまで気に留めていなかった身近な出来事に対して課題意識を抱きはじめ

つつも所属感や参画意欲を維持しているということになる。今回の二つの実践は，自己中心性が高く，集団としての帰属意識や所属感を構築していく過程にある小学校低学年期におけるものであった。今回の QU テストの結果は，子どもたちがより望ましい集団のあり方について視野を広げ，そこに携わろうとする意欲を高めていると受け止めることができる。子どもたちが，このような受け止めをもって学習活動を進めたのは，子どもたちの思いを軸に据え，学習展開や内容を柔軟に構成してきた発想によるものであると考えることができる。「子ども軸の道徳科」の実践により，より望ましい学級集団を前向きに目指す子どもたちの姿を垣間見ることができた。

第２に,学習単元の成果を QU テストを使って数値化することにより，学習の成果を客観的に分析・評価できたことである。

子どもたちがより安心して学校生活を送り，ひいては自己の生活や生き方について見つめていくためには，道徳教育の指導の効果を積極的に評価することは欠かせない。本実践では，道徳の授業を中心に据えた教育実践の成果を統計的に処理し，その効果について検討した。この点に抵抗感を覚える人もいるかも知れない。しかし，今回の実践では個別の変容を数理的に表現しているのではなく，学級集団の様相を統計処理の対象にしている点において，個々人の人間性に関わる評価に対する配慮がなされている。学習活動が児童に与える影響についてこのような量的な評価することで，学習指導の効果を客観的な指標で分析・評価することができ，授業者にとっても授業改善のヒントを得るために意味のあることである。

課題としては，数値化されたデータで客観的に見ることによって，個々の子どもの学びや育ちを見る質的な捉えがおろそかにならないよう留意する必要があることである。個々人の学びや育ちについては，ワークシートの記述内容や発言等を質的に捉え，その児童の個別の育ちに目を向けることも忘れてはいけない。今後も，子どもたちの思いを尊重し，より望ましい成長を図ることができる授業実践の方法について検討を重ねていきたい。

主な引用（参考）文献

１）押谷由夫（2017)『アクティブ･ラーニングを位置づけた小学校特別の教科道徳の授業プラン』明治図書出版

２）田沼茂樹（2017)『指導と評価の一体化を実現する道徳科カリキュラム・マネジメント小学校編』学事出版

３）田沼茂樹（2016)『アクティブ･ラーニングの授業展開』東洋館出版社

４）渡邉満 他（2016)『小学校における『特別の教科　道徳』の実践』北大路書房

５）鈴木由美子　宮里智恵（2012)『やさしい道徳授業のつくり方』渓水社

６）文部科学省『小学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』